

カーライル博物館

夏目漱石



公園の片隅に通りがかりの人を相手に演説をしている者があ  
る。向うから来た釜形かまがたの尖とがった帽子を被かずいて古ぼけた外套がいとうを  
ねこぜ  
猫背ねこぜに着た爺じいさんがそこへ歩とどみを佇とどめて演説者を見る。演説者  
はぴたりと演説をやめてつかつかとこの村夫子そんぼうしのたたずめる前  
に出て来る。二人の視線がひたと行き当る。演説者は濁りたる  
いなかぢいなかぢようし  
田舎調子いなかぢようしにて御前はカーライルじゃないかと問う。いかにもわ  
しはカーライルじゃと村夫子が答える。チエルシーの哲人せうじんと人  
が言いは嘸はやすのは御前の事かと問う。なるほど世間ではわしの事を  
チエルシーの哲人せうじんと云うようじゃ。セージと云うは鳥の名だに、  
人間のセージとは珍らしいなと演説者はからからと笑う。村夫  
子はなるほど猫も杓子しゃくしも同じ人間じゃのにことさらに哲人せうじんなど  
と異名いみょうをつけるのは、あれは鳥じゃと渾名あだなすると同じようなも

ののだのう。人間はやはり当り前の人間で善よかりそうなもののだのに。と答えてこれもからからと笑う。

余は晚餐前に公園を散歩するたびに川縁かわべりの椅子いすに腰を卸して向側ながを眺ながめる。倫敦ロンドンに固有なる濃霧はことに岸边に多い。余が桜の杖あじに頤さきを支さえて真正面を見てみると、遙はるかに対岸おうらいの往来はを這はい廻る霧の影は次第に濃くなつて五階立だての町続きの下からぜんぜんこの揺曳たなびくものの裏うちに薄れ去つて来る。しまいには遠き未来の世を眼前に引き出いだしたるように窈然ようぜんたる空うちの中にとりとめのかかぬ鳶色とびいろの影が残る。その時この鳶色の奥にぼたりぼたりと鈍き光りが滴したたるように見え初める。三層四層五層共ともに瓦斯ガスを点じたのである。余は桜の杖をついて下宿の方へ帰る。帰る時必ずカーライルと演説使いの話しを思いだす。かの溟濛めいもうたる瓦斯の霧に混まざる所が往時この村夫子そんぼうしの住んでおつたチエルシー

なのである。

カーライルはおらぬ。演説者も死んだであろう。しかしチェルシーは以前のごとく存在している。否彼の多年住み古した家屋敷さえ今なお儼然と保存せられてある。千七百八年チェイン・ロウが出来てより以来幾多の主人を迎え幾多の主人を送ったかは知らぬがとにかく今日まで昔のままに残っている。カーライルの歿後は有志家の発起で彼の生前使用したる器物調度図書典籍を蒐めてこれを各室に按排し好事のものにはいつでも縦覧せしむる便宜さえ謀られた。

文学者でチェルシーに縁故のあるものを挙げると昔しはトマス・モア、下つてスモレット、なお下つてカーライルと同時代にはリ・ハントなどがもつとも著名である。ハントの家はカーライルの直近傍で、現にカーライルがこの家に引き移つた晩尋

ねて来たという事がカーライルの記録に書いてある。またハン  
トがカーライルの細君にシェレーの塑像そぞうを贈ったという事も知  
れている。このほかにエリオットのおった家とロセツチの住ん  
だ邸やしきがすぐ傍そばの川端に向いた通りにある。しかしこれらは皆す  
でに代だいがかわつて現に人が這入はいつてゐるから見物は出来ぬ。た  
だカーライルの旧廬きゅうろのみは六ペンスを払えば何人なんびとでもまた何時  
でも随意に観覧が出来る。

チエイン・ローは河岸端かしつばたの往来を南に折れる小路でカーライ  
ルの家はその右側の中頃あたに在る。番地は二十四番地だ。

毎日のように川を隔へだてて霧の中にチエルシーを眺ながめた余はあ  
る朝ついに橋を渡つてその有名なる庵いおりを叩たたいた。

庵りというと物寂ものさびた感じがある。少なくとも瀟洒しようしやとか風流  
とかいう念ともなと伴ともなう。しかしカーライルの庵いおりはそんな脂やにっこい華奢きやしや

なものではない。往来おうらいから直ただちに戸たが敲たたけるほどの道傍みちばたに建てられた四階造づくりの真四角な家である。

出張しゅちやうした所も引き込んだ所もないのべつに真直まっすぐに立たつてゐる。まるで大製造場の煙突の根本を切きつてきてこれに天井を張はつて窓まどをつけたように見える。

これが彼が北の田舎いなかから始めて倫敦ロンドンへ出て来て探たしに探たし抜ぬいて漸々ようようの事ことで探たし宛あてた家である。彼は西を探たし南を探たしハンプステッドの北まで探たしてついに恰好かつこうの家を探たし出す事が出で来きず、最後にチェイン・ローへ来てこの家を見てもまだすぐに取とりきめるほどの勇氣はなかつたのである。四千万の愚物ぐぶつと天下てんかを罵ののした彼も住家すみかには閉口へいこうしたと見えて、その愚物の中に当然たうぜん勘定せらるべき妻君へ向けて委細を報知してその意向を確めた。細君の答に「御申越の借家しやくやは二軒共不都合ふごうもなき様被存候ぞんぜられえは

私倫敦へ上り候迄のぼ双方共御明け置願度そろまで若し又それ迄に取極め候そろ必要相生じ候節そろせつは御一存にて如何いかがとも御取計ひとらい被下度候とあつた。カーライルは書物の上でこそ自分独りわかつたような事をいうが、家をきめるには細君の助けに依らなくては駄目と覺悟をしたものと見えて、夫人の上京するまで手を束ねて待つていた。四五日しごんちすると夫人が来る。そこで今度は二人してまた東西南北を馳かけ廻つた揚句の果はてやはりチェイン・ローが善いいという事になつた。両人ふたりがここに引き越したのは千八百三十四年の六月十日で、引越の途中に下女の持つていたカナリヤが籠かごの中で嘔さえずつたという事まで知れている。夫人がこの家を撰えらんだのは大おおに氣に入つたものかほかに相当なのがなく、やむをえなんだのか、いずれにもせよこの煙突のごとく四角な家は年に三百五十円の家賃をもつてこの新世帯の夫婦を迎えたのである。カー

ライルはこのクロムウエルのごときフレデリック大王のごときまた製造場の煙突のごとき家の中でクロムウエルを著わしフレデリック大王を著わしデイスレリーの周旋しゅうせんにかかる年給しりぞを擯けて四角四面に暮したのである。

余は今この四角な家の石階の上に立って鬼の面のノッカーをコツコツとたた敲く。しばらくすると内から五十かっごう恰好の肥った婆さんが出て来て御這入おはいりと云う。最初から見物人と思つていらしい。婆さんはやがて名簿のようなものを出して御名前をと云う。

余は倫敦滞留中四たびこの家に入り四たびこの名簿に余が名を記録した覚えがある。この時は実に余の名の記入初きにゆうはじめであった。なるべく丁寧に書くつもりであったが例に因よつてはなはだ見苦しい字が出来上った。前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でここへ来たのは余が始め

てだなと下らぬ事が嬉しく感ぜられる。婆さんがこちらへと云うから左手の戸をあけて町に向いた部屋に這入る。これは昔し客間であつたそうだ。色々なものが並べてある。壁に画えやら写真うしやらがある。大概はカーライル夫婦の肖像のようだ。後ろの部屋にカーライルの意匠に成つたという書棚がある。それに書物が沢山詰まつている。むずかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。読めそうもない本がある。そのほかにカーライルの八十の誕生日の記念のために鑄いたという銀牌ぎんぱいと銅牌どうぱいがある。金牌きんぱいは一つもなかつたようだ。すべての牌はいと名のつくものがむやみにかちかちしていつまでも平気に残っているのを、もろうた者の煙のごとき寿命と対照して考えると妙な感じがする。それから二階へ上る。ここにまた大きな本棚があつて本が例のごとくいっぱい詰まつている。やはり読めそうもない本、聞い

た事のなさそうな本、入りそうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あった。この部屋も一時は客間になっておつたそうだ。ビスマークがカーライルに送つた手紙と普露西プロシアの勲章がある。フレデリック大王伝の御蔭と見える。細君の用いた寢台ねだいがある。すこぶる不器用な飾りかざり気けのないものである。

案内者はいずれの国でも同じものと見える。先さきつきから婆さんは室内の絵画器具について一々説明を与える。五十年間案内者を専門に修業したものであるまいが非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたこうしたとあたかも口から出でまか任にんせに喋舌しゃべつているようである。しかもその流暢りゆうちやうな弁舌べんごに抑揚おさげがあり節奏せつそうがある。調子が面白いからその方ばかり聴いていると何を言っているのか分らなくなる。始めのうちは聞き返したり問い返したりして見たがしまいには面倒になつたから御前は御

前で勝手に口上を述べなさい、わしはわしで自由に見物するか  
らという態度をとった。婆さんは人が聞こうが聞くまいが口上  
だけは必ず述べますという風で別段厭あきた景色けしきもなく怠おこたる様子  
もなく何年何月何日をやってゐる。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の  
下に十坪ほどの庭がある。右も左もまた向うも石の高塀たかかべで仕切  
られてその形はやはり四角である。四角はどこまでもこの家の  
附属物かと思う。カーライルの顔は決して四角ではなかつた。  
彼はむしろ懸崖けんがいの中途が陥落して草原の上に伏しかかつたよう  
な容貌ようぼうであつた。細君は上出来の辣蕪らつきようのように見受けらるる。  
今余の案内をしている婆さんはあんぱんのごとく丸まるい。余が  
婆さんの顔を見てなるほど丸いなと思うとき婆さんはまた何年  
何月何日を誦じゆし出した。余は再び窓から首を出した。

カーライル云う。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧みどりりなる野原、及びその間に点綴てんてつする勾配こうばいの急なる赤き屋根のみ。西風の吹くこの頃の眺めながはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見ようと思ひ、青き野を眺めながようと思つて実は裏の窓から首を出したのである。首はすでに二返へんばかり出したが青いものも何にも見えぬ。右に家が見える。左ひだりりに家が見える。向むこうにも家が見える。その上には鉛色なまりいろの空が一面に胃病やみのように不精無精ふしようぶしように垂れかかっているのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の続きを朗らかに読誦どくじゆしている。

カーライルまた云う倫敦ロンドンの方かたを見れば眼に入るものはウエストミンスター・アベールとセント・ポールズの高塔の頂いただきのみ。その他幻まぼろしのごとき殿宇でんうは煤すすを含む雲の影の去るに任せて隠見す。

「倫敦の方」とはすでに時代後れの話である。今日こんにちチエルシーに来て倫敦の方を見るのは家の中に坐うちつて家の方を見ると同じ理窟りくつで、自分の眼で自分の見当けんとうを眺めると云うのと大した差違はない。しかしカーライルは自らみずか倫敦に住んでいるとは思わなかつたのである。彼は田舎いなかに閑居して都の中央にある大伽藍だいがらんを遙はるかに眺めたつもりであつた。余は三度みび首を出した。そして彼のいわゆる「倫敦の方」へと視線を延ばした。しかしウエストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。数万の家、数十万の人、数百万の物音は余と堂宇との間に立ちつつある、漾ただよいつつある、動きつつある。千八百三十四年のチエルシーと今日のチエルシーとはまるで別物である。余はまた首を引き込めた。婆おばさんは默然もくねんとして余の背後ちよりつに佇立している。

三階あがに上る。部屋へやの隅を見ると冷やかにカーライルの寝台ねだいが横よこた

わっている。青き戸帳とばりが物静かに垂れて空むなしき臥床ふしどの裡うちは寂然せきぜんとして薄暗い。木は何の木か知らぬが細工さいくはただ無器用で素朴であるというほかは何らの特色もない。その上に身を横えた人の身の上も思い合わさる。傍かたわらには彼が平生使用した風呂桶ふろおけが九鼎きゅうていのごとく尊げに置かれてある。

風呂桶おなべとはいうもののバケツの大きいものに過ぎぬ。彼がこの大鍋おなべの中で倫敦すずの煤すすを洗い落したかと思うとますますその人となりしのが偲しのばれる。ふと首を上げると壁の上に彼が往生おうじょうした時に取つたという漆喰しつくいせい製の面型マスクがある。この顔だなと思う。この炬燵こたつやぐら櫓ぐらぐらいの高さの風呂はいに入つてこの質素な寝台の上に寝て四十年間やかましい小言こごとを吐き続けに吐いた顔はこれだなと思う。婆よどさんの淀よどみなき口上くちがしが電話口で横浜の人の挨拶を聞くように聞える。

宜よろしければ上りましようとう婆さんがいう。余はすでに倫敦の  
 塵ちりと音を遙はるかの下界に残して五重の塔の天辺てっぺんに独坐するような  
 気分がしているのに耳の元で「上りましよう」という催促を受  
 けたから、まだ上があるのかなと不思議に思った。さあ上ろう  
 と同意する。上れば上るほど怪しい心持が起りそうであるから。  
 四階へ来た時は縹渺ひょうびょうとして何事とも知らず嬉しかった。嬉し  
 いというよりはどことなく妙であった。ここは屋根裏である。  
 天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣たてがみのごとき形かたちをして  
 その一番高い背筋せすじを通して硝子ガラス張りの明り取りが着いている。  
 このアチックに洩もれて来る光線は皆頭の上から真直まっすぐに這入はいる。  
 そうしてその頭の上は硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空で  
 ある。眼まなこに遮おさるものは微塵みじんもない。カーライルは自分の経営で  
 この室しつを作った。作ってこれを書斎とした。書斎としてここに

立籠たてこもつた。立籠たてこもつて見て始めてわが計画の非なる事を悟つた。夏は暑くておりにくく、冬は寒くておりにくい。案内者は朗読的にここまで述べて余を顧かえりみた。真丸まゐまるな顔の底に笑の影が見える。余は無言のままうなずく。

カーライルは何のためにこの天に近き一室の経営に苦心したか。彼は彼の文章の示すごとく電光的人であつた。彼の癩癬かんべきは彼の身边を圍繞いにようして無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作ふけに耽ふけるの余裕を与えなかつたと見える。洋琴ピアノの聲、犬の聲、鶏おうむの聲、鸚鵡おうむの聲、いつさいの聲はことごとく彼の鋭敏なる神經おうのうを刺激して懊惱おうのうやむ能あたわざらしめたる極きよくついに彼をして天に最も近く人にもつとも遠ざかれる住居をこの四階の天井裏に求めしめたのである。

彼のエイトキン夫人に与えたる書翰しよかんにいう「此夏中なつじゅうは開け放

ちたる窓より聞ゆる物音に悩まされ候事そろことひとかた一方ならず色々修繕も  
 試み候えども寸毫すんごうも利目無之夫ききめこれなくそれより篤とくと熟考の末家の真上に二  
 十尺四方の部屋を建築致す事に取極め申候そろ是は壁を二重に致し  
 光線は天井より取り風通しは一種の工夫をもつて差支さしかえなき様致  
 す仕掛に候えば出来上り候上そろは仮令たとい天下の鶏共一時に鬨とぎの声を  
 揚げ候そろとも閉口仕つかまつらざる積つもりに御座候そろ」

かくのごとく予期せられたる書齋は二千円の費用にてまづま  
 ず思い通りに落成を告げて予期通りの効果を奏したがこれと同  
 時に思い掛けなき障害がまたも主人公の耳辺じへんに起つた。なるほ  
 ど洋琴ピアノの音ねもやみ、犬の声もやみ、鶏の声、鸚鵡ひよこの声も案のご  
 とく聞えなくなつたが下層にいるときは考だに及ばなかつた寺  
 の鐘、汽車の笛ふえさては何とも知れず遠きより来きたる下界かがいの声のろいが呪  
 のごとく彼を追いかけて旧のごとくに彼の神経を苦しめた。

声。英国においてカーライルを苦しめたる声は独逸ドイツにおいてシヨペンハウアを苦しめたる声である。シヨペンハウア云う。「カントは活力論あらわを著せり、余は反つて活力を弔とむらう文を草せんとす。物を打つ音、物を敲たたく音、物の転ころがる音は皆活力の濫用にして余はこれがために日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何らの感をも起さざる多数の人我説わがせつをきかば笑うべし。されど世りくつに理窟りくつをも感ぜず思想をも感ぜず詩歌しうかをも感ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そは正にこの輩やからなる事を忘るるなかれ。彼らの頭腦の組織は麤獷そろうにして覚さとり鈍き事その原因たるは疑うべからず」カーライルとシヨペンハウアとは実は十九世紀の好一對である。余がかくのごとく回想しつた時に例の婆さんがどうです下りましようかと促うながす。

一層を下くだるごとに下界に近づくような心持ちがする。冥想めいそうの

皮が剥はげることく感ぜらるる。階段を降り切つて最下の欄干に倚よつて通りを眺ながめた時にはついに依然たる一個の俗人となり了おわつてしまつた。案内者は平気な顔をして厨くりやを御覧なさいといふ。厨は往來おうらいよりも下にある。今余が立ちつつある所よりまた五六段の階を下らねばならぬ。これは今案内をしている婆さんの住居すまいになつている。隅に大きな竈かまどがある。婆さんは例の朗読調をもつて「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが初めてカーライルを訪問した時彼ら兩人はこの竈の前に対坐して互に煙草たばこを燻くゆらすのみにて二時間の間一言ひとことも交まじえなかつたのであります」といふ。天上に在あつて音響を厭いといたる彼は地下に入つても沈黙を愛したるものか。

最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見廻して見ると木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話

しによると昔は桜もあつた、葡萄ぶどうもあつた。胡桃くるみもあつたそう  
だ。カーライルの細君はある年二十五錢ばかりの胡桃を得たそ  
うだ。婆さん云う「庭の東南の隅を去る五尺余の地下にはカー  
ライルの愛犬ニロが葬むらられております。ニロは千八百六十年  
二月一日に死にました。墓標も当時は存しておりましたが惜し  
いかなその後取む扱われました」と中々精くわしい。

カーライルが麦藁帽むぎわらぼうを阿弥陀あみだに被かぶつて寝巻姿のまま啣くわえ煙管ぎせる  
で逍遙しょうようしたのはこの庭園である。夏の最中もなかには蔭深き敷石の上  
にささやかなる天幕テントを張りその下に机をさえ出して余念もなく  
述作に従事したのはこの庭園である。星明あきらかなる夜最後よの一ふ  
くをのみ終りたる後、彼が空を仰いで「嗚呼ああ余が最後なんじに汝を見  
るの時は瞬刻の後のちならん。全能の神が造れる無辺大の劇場、眼  
に入る無限、手に触ふる無限、これもまた我が眉目かすを掠めて去

らん。しかして余はついにそれを見るを得ざらん。わが力を致せるや虚ならず、知らんと欲するや切なり。しかもわが知識はただかくのごとく微びなり」と叫んだのもこの庭園である。

余は婆さんの労に酬むくゆるために婆さんの掌てのひらの上に一片いっぺんの銀貨を載のせた。ありがとうと云う声さえも朗読的であつた。一時間の後倫敦ロンドンの塵ちりと煤すすと車馬の音とテーマムス河とはカーライルの家を別世界のごとく遠かたき方へと隔へだてた。



底本：「夏目漱石全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 10 月 27 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000 年 8 月 31 日公開

2004 年 2 月 26 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。